シューベルト：弦楽三重奏曲 変ロ長調 D. 471

この弦楽三重奏曲は、シューベルトが 19 歳の時、1816 年に作曲されました。この年、彼は教職を辞して音楽活動に専念する道を選び、作曲家としての新たな一歩を踏み出しました。そのような転機の中で生まれた本作は、若きシューベルトの創作意欲に満ちた作品として位置づけられます。

この作品は未完成であり、第 1 楽章のみが現存していますが、古典派の伝統を受け継ぎつつ、シューベルトならではの抒情性と独創性を感じさせる音楽が展開されています。ハイドンやモーツァルト、さらに彼の師であったサリエリからの影響が随所に見られる一方、シューベルト独自の詩的な感性が作品全体に彩りを添えています。

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという編成で演奏される第 1 楽章は、古典的なソナタ形式に則って構成されています。冒頭ではヴァイオリンが穏やかで優雅な旋律を奏で、ヴィオラとチェロがその響きを緻密に支えます。この主題は明朗で親しみやすく、続く展開部ではさらに豊かな音楽的表現へと発展していきます。また、第 2 主題では軽快なスピッカートや明るい下降スケールが特徴的で、聴衆に鮮やかな印象を残します。

シューベルトは、この作品を通じて古典派音楽の形式美を深く尊重しつつ、自らの感性を見事に表現しています。抒情性と構築性が巧みに調和したこの弦楽三重奏曲は、シューベルトが若き日々に抱いていた音楽への情熱と、作曲家としての確かな可能性を示しています。未完成ながらも、豊かな音楽的魅力を備えたこの作品は、今なお多くの演奏者と聴衆に愛されています。

解説　**SeetalClassics Tokyo Maya Haneda**